

一・神西湖の概要

汽水湖（淡水・塩水の混ざり合った湖）

周囲 5 km

面積 一・三五²km²

水深 中心部 二・一 m

シジミの漁場 神西湖（〇・一三²km²）、

差海川（〇・〇五²km²）、合計（〇・一八²km²）

流入河川

十間川

九景川

常楽寺川

姉谷川

後谷川

差海川

保知石川

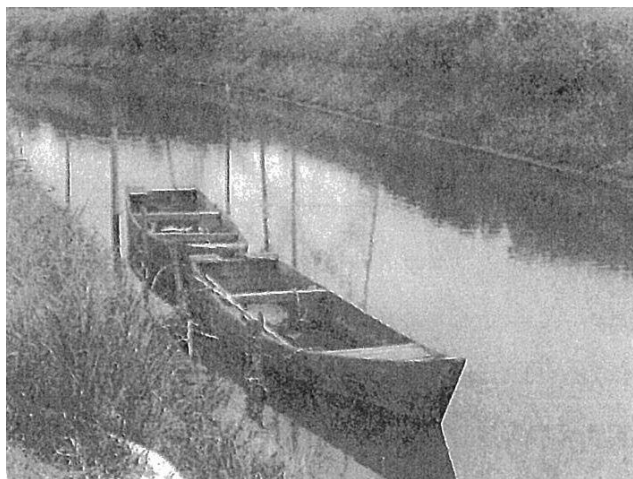


旧出雲市全景 平成22年（（出典：流域住民の合意形成と川づくり
（財団法人リバーフロント整備センター））

二・神西湖漁業協同組合の変遷

（一）明治四十五年頃の神西湖の漁業

水産研究誌第九巻第二号によると、明治四十五年頃の神西湖の水深は最深部で十尺（三メートル）弱、七〜八尺（二〜二・四メートル）が大部分を占め、漁業者は百四十一名であり、漁業の状況は「表1」・「表2」の通りであった。魚種も多く豊かな湖であり、神西湖周辺は砂質の畑が多く、特に西浜村では藻が肥料として昭和十年代頃まで利用されていた。



採藻船としても使われていた小型の木船
里海モク採り物語ー50年前の水面下の世界
昭和40年頃（提供：平塚純一）

表 1. 神西湖漁獲高調査

名種	水揚高（貫）	価格（円）
うなぎ	5.815	6,696
ぼら	2.023	960
いな	5.713	2,014
このしろ	0.436	207
ふな	2.716	1,951
こひ	0.143	180
すずき	0.500	500
ゑび	0.688	364
しらうを	0.189	378
蜆介	2.800	700
其他	1.267	380
肥料藻	30.000	300
合 計	52.290	14,630

（二）神西湖漁業協同組合の設立

昭和二十四年に戦前の旧漁業権（海、内水面）が水産業協同組合法の施行に伴い、全国一律に、現在の漁業権となった。それにあわせて、昭和二十四年十二月に神西湖漁業協同組合を設立した。

組合設立当初より、神西湖の代表理事組合長は神西村の村長が組合長職を兼務し、また、事務所を役場内に置いていた。昭和三十一年の出雲市合併後は、選挙にて役員を選

表 2. 神西湖漁業趨勢

漁具種	敷	使用期間	魚種
多葉漬	32	3月～10月	うなぎ、ゑび
延縄	8	3月～10月	うなぎ
投網	62	周年	ぼら、ふな、すずき、こひ
縫網	3	9月～2月	こひ、ふな、ぼら他
釜	1	5月～9月	うなぎ
浮網	2	3月～4月	しらうを、わかさぎ
手網	38	周年	雑魚
旋罟	2	秋～冬	ぼら、こひ、ふな
釣魚	11	周年	ふな他
鰻搔	13	周年	うなぎ
糸川網	1	3月～4月	わかさぎ
張待網	2	9月～2月	ふな、こひ
中曳網	3	周年	ふな、こひ、なまづ
地曳網	1	周年	ふな、こひ、なまづ
揚操網	1	9月～2月	いな、ぼら、このしろ
張切網	1	9月～2月	ふな、こひ

出し、互選にて組合長を選出していた。組合の運営は、会計理事が自宅を事務所として行っていた。

(三) 歴代代表理事組合長(と役員の変遷)

今岡	伊三郎	
磯田	方一郎	
米山	連三郎	
中尾	喬	昭和三十九年〳
馬庭	幸芳	昭和四十二年四月〳
秦	増造	昭和六十年四月〳
小村	恒一郎	昭和六十三年四月〳
先久	務	平成九年四月〳
田中	正人	平成十五年四月〳
角	光男	平成二十四年十月〳
野津	徳男	平成二十七年三月〳
角	光男	平成二十七年八月〳
田中	正人	平成二十九年四月〳

(四) 組合員数の変遷

昭和二十四年の組合発足当時の組合員数は四十七人で、以降六十〳七十名で推移した。昭和五十年代に入ってシジミが異常繁殖し准組合員制度をつくり、組合員数が百七十八人前後で推移するようになった。(正准の比率は約五十%)

である。)平成五年頃から次第に組合員数が減少し始め(正組合員が増加、准組合員が減少)、平成十五年には百五十人前後となりさらに減少している。

平成三十年四月一日現在 組合員数

正組合員(百十一) 准組合員(三) 合計(百十四)

三・施設建設の歴史および公共工事等との関わり

(一) 建て切り建設

海から入ったボラ・セイゴ・チヌ等の魚は、大雨による濁り水、時化・高波による潮位高、秋から冬にかけての低水温で、海に帰る習性があるので、戦前から、河口に松杭・竹スズを設置し、神西湖で安定した漁ができるようにしていた。しかし、大時化・大水のたびに流されるので、安定した漁ができるように、コンクリート製(ピュア)の建て切りを昭和二十八年に建設した。その後、約四十年間、組合員の生活の糧である漁場、神西湖の塩分濃度・魚介類の生態・生息環境を守ってきた。

(二) 建て切り撤去

昭和三十九年七月、昭和四十九年七月、二度の洪水被害

の対策として、神西湖から差海川放水路が計画され、神西湖の水流、水位の変化、差海川の流速等の調査のために、建て切りの撤去が必要となり、平成九年五月に撤去された。



建て切り 昭和40年（提供：神西湖漁協）

（三）塩分調整堰建設

神西湖内の水環境（塩分調整等）の水門的役割をしていた建て切りの一部撤去が平成九年三月～四月に始まり、鉄柵・基礎を一部撤去、取り壊したため、徐々に塩分濃度が

上昇し、神西湖本来の淡水系川魚（鮒、鯉）が絶滅危惧種になる懸念が出てきた。また、神西湖の主力になったシジミ漁場に外来の二枚貝（コウロエンヒバリ貝）が大量発生し、神西湖の漁場がヘドロ化し、深刻な問題となった。現状を県に働きかけ、平成二十年二月に県知事の視察を受け、平成二十年九月から塩分調整堰の工事にかかり、平成二十一年五月に完成し、神西湖の守護神となる。



塩分調整堰 平成29年（提供：神西湖漁協）

（四）組合事務所の建設

前述のとおり、組合事務所は、役場内にあったり、会理事の自宅であったりしたが、平成元年より山陰建設工業の会長が組合長に就任し、会社の事務所の一部を組合事務所として借用していた。その後、平成八年に組合事務所建設を検討し、平成九年二月に現在の住所で竣工式を迎えることになった。



組合事務所（提供：神西湖漁協）

（五）神西湖漁業協同組合卸売市場の開設

平成十四年～十五年頃より、神西湖の主力であるシジミの漁獲量が、塩分濃度の上昇のため減少しつつあり、また、日本一のシジミ産地である宍道湖との区別化として、付加価値を付け、少量でも売れるシジミを検討した。その結果、M・L玉以上の粒の大きいシジミに規格を統一し、神西湖産としてブランド化を目指すために、平成二十三年八月十六日に市場を開設し、現在十業者が入札を行っている。



卸売市場開設 平成23年（提供：神西湖漁協）

(六) 覆砂台船「福砂丸」の製作

神西湖のシジミ漁場は、湖岸に限られており、シジミの生産を今以上にするためにも覆砂事業が必要不可欠である。沖合に漁場を作るため、また、増殖のためにも台船が重要な役割を果たし、漁場の活性化につなげている。

平成二十五年
六月十八日竣工。



福砂丸 平成25年（提供：神西湖漁協）

四・神西湖の漁業

(一) 神西湖に生息する魚類

昭和五十年代後半には、主力であった、ボラ・スズキ漁が消費者の魚離れから衰退し、シラウオ・アマサギも神西湖から姿を消し、現在生息しているのは次のとおりである。

ボラ・フナ・コイ・シジミ・スズキ・ウナギ・モロゲエビ・テナガエビ・ハゼ



フナ



ウナギ



モクスガニ



シラウオ



ヤマトシジミ



神西湖に生息する魚類（出典：流域住民の合意形成と川づくり
（財団法人リバーフロント整備センター））

(二) 神西湖の漁業（漁業権種）

昭和五十年代の初め、シジミが異常繁殖し、魚漁が主体であったが、シジミ漁が主力になり、年間四百〜五百トンの漁獲量になった。主力産品は、ヤマトシジミ、ウナギ、エビ、フナ、モクズガニである。

(三) 神西湖で使用される漁具

昭和二十年代より昭和五十年代の後半までは、ボラ・スズギの刺網、ウナギ・エビの竹筒・マス網であったが、現在残っているのはウナギの竹筒、ウナギ・エビのマス網のみとなっており、刺網伝統漁法は衰退した。

(四) 魚種別漁獲量の移り変わり

○ボラ・スズギ・フナ

昭和二十年〜五十年後半

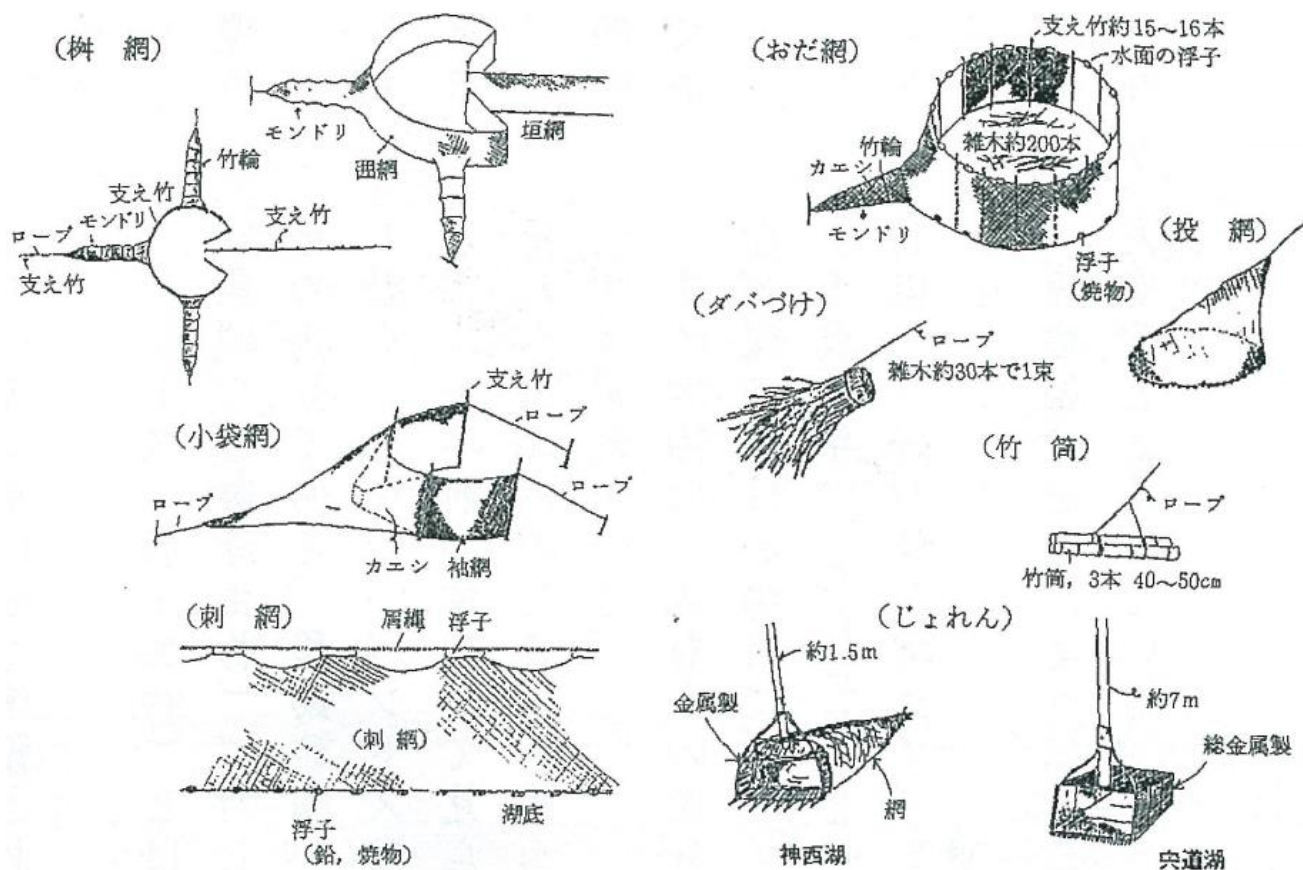
※消費量が減少

○ウナギ・モロゲエビ・川エビ・ハゼ

※資源量が減少

○シジミ 昭和五十年〜現在

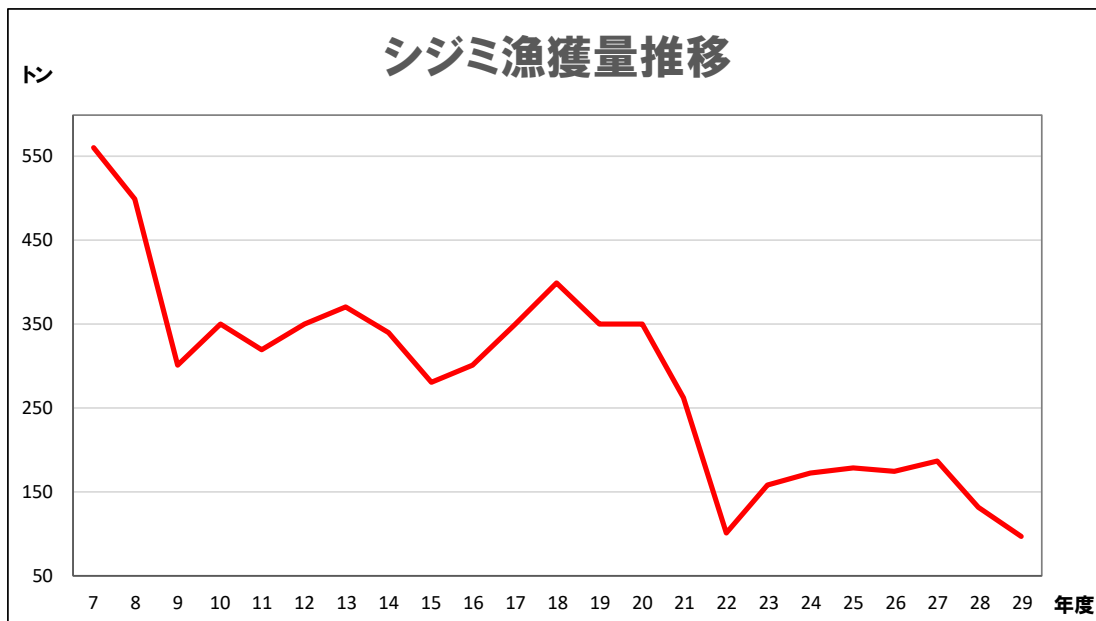
※最盛期は昭和五十年年代〜平成十年代



神西湖で使用される漁具（出典：流域住民の合意形成と川づくり
（財団法人リバーフロント整備センター））

(四百～五百トン)

平成二十年代 百七十～二百トンで推移している



五．資源量増殖活動の歴史

(一) 覆砂

限られた漁場、生産性を上げるために漁場を造成している。

(二) 放流事業

昭和初期から継続的に、ワカサギ・コイ・ウナギ・シジミ・モクズガニ・フナ・テナガエビの放流を行っている。

(三) シオグサ（ノトロ）の除去

塩分濃度が上がると大量発生する。

組合員総出で年数回実施。



ノトロの除去（提供：神西湖漁協）

(四) 湖底耕耘

ポンプによる湖底の沈殿物を攪拌する作業

(五) 草ごみ、油類の流入との戦い

十間川・保知石川等流入河川から、農作業時期になると大量の草ゴミが流入する。また、油類の流入もある。

(六) コウロエンカワヒバリガイとの戦い

建て切り撤去後、外来の二枚貝が異常発生している。

(七) シジミ漁獲制限の歴史

シジミの資源量を守るため一日、シジミ箱一杯の制限を設けている。

(八) 漁獲サイズ一三ミリ化への決断

シジミの資源量確保と神西湖産のブランド化のためにSサイズを廃止し、M・Lサイズとする。

(九) 木材利用を促進する増殖技術開発事業

神西湖の漁場環境の悪化等によって資源量が減少し、フ

ナやウナギ、コイ、エビ類はほとんど獲れない状況である。また、神西湖の漁獲量の大部分を占めるヤマトシジミについても、漁獲量が激減している。これは、湖の塩分濃度の変化、底質の細粒分化などが原因と考えられている。

一方、島根県は県土面積の約七割が山地であり、森林の有効活用を図っていく必要があり、特に、間伐材の利用については、出雲地域においても土木資材等の限定的な利用にとどまっている状況である。そこで、神西湖における漁獲対象種の資源量増加を目的とした間伐材利用の増殖礁の開発を行うことを検討した。具体的には、木材使用量が多い増殖礁を開発し、覆砂と組み合わせる稚貝収集、着底促進機能を有する多面的な増殖礁として実証した。今回の事業は、出雲市、出雲地区森林組合及び神西湖漁業協同組合で構成する神西湖地域協議会で技術開発及び実証を行った。

平成二十六年年度に製作・設置した実験区において、増殖効果・耐久性等のモニタリング調査を継続中である。



間伐材利用の増殖礁（提供：神西湖漁協）

六．神西湖が直面している課題

（一）水質、底質の悪化

上流より草ゴミ、農薬散布、化学肥料の流入の影響もあり、特に、平成十九年二月には、神西湖産のシジミの残留農薬が基準値を超え、操業の自粛に入った。関係機関で対策を行い、五月には基準値が下がり自粛を解除した。

（二）ヘドロの堆積

今現在でも、一年間あたり三センチのスピードで堆積している。

（三）伝統漁業の後継者不足

資源量の増殖、神西湖の活性化が必要である。

（四）建て切り基礎の撤去

神西湖内の水の循環対策が必要である。

（五）全国に認知されるブランド化への道

水質・味の良さをアピールし、ブランド化を実現する。

七．神西湖の行事

（一）弁天宮祭り

昭和四十年に、神西の商店会によって神西祭りが開催され、神西湖の中で花火大会を行っていたが、昭和四十年代半ばに中止となり、漁協が引き続き、大漁祈願祭とシジミの供養を兼ねて、毎年八月に、武田宮司の司祭の下開催している。



弁天宮祭り（提供：神西湖漁協）

（二）神西湖清掃

神西湖漁業協同組合、神西地区自治協会、神西コミュニティセンター主催で、地元各種団体の参加により、神西湖の清掃活動を行っている。



神西湖清掃（提供：神西湖漁協）



神西湖清掃（提供：神西湖漁協）



フナの放流体験（提供：神西湖漁協）



シジミの収穫体験（提供：神西湖漁協）

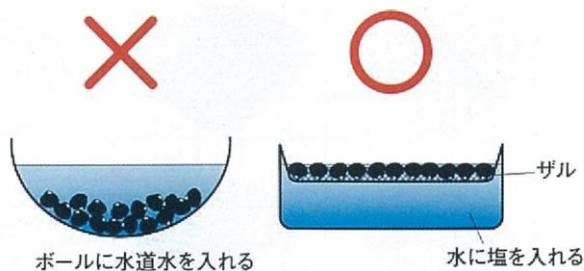
（三）ふれあい事業
神西湖の現状を小さいうちから理解してもらうために、毎年、小学校、幼稚園、保育園を対象に、フナの放流、シジミの収穫体験等の事業を行っている。

シジミの美味しい食べ方

・水道水(真水)での砂抜きはだめ！

1ℓの水道水に約 10gの食塩を入れた食塩水を使用し砂出しを行う。シジミを広いザルに入れ、ザルは容器の底から離し、シジミの殻の一部が水面すれすれになるようにする。そうすれば、シジミが酸欠にならない上に、排泄物を再び取り込むこともなくきれいに砂出しができる。

また、シジミはよく洗い、砂出しは3時間以上行くとよい。

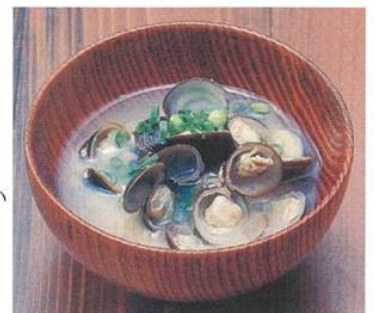


シジミの砂抜きのやり方

・空中放置・冷凍で「うま味」が増す！

ほとんどの食品は新鮮なもののほど美味しく、冷凍すると味が落ちるものであるが、シジミは空中放置や冷凍でも「うま味」が落ちない。

短期の保存であれば、冷蔵庫の中に水なしで乾かないようにすれば美味しく食べられる。長期間であれば冷凍がお勧めで、1回に使用する量だけを小分けにしてビニール袋に入れ、乾燥しないように輪ゴムなどで密封しておくと使いやすく便利である。



シジミの美味しい食べ方（出典：流域住民の合意形成と川づくり
（財団法人リバーフロント整備センター））